

全国産業安全衛生大会の 誕生とあゆみ

◆ 昭和7年、第1回『全国産業安全大会』 東京で開催

第1回の全国産業安全大会が、(財)産業福利協会の主催により、1932(昭和7)年11月21日から3日間、東京・神田の学士会館で開催され、300人を超える人たちであふれた。

安全運動の先駆者・蒲生俊文の司会のもと、“同志が集う”会場には熱気があふれ、互いに手を取り合って安全運動を推進していこうとする連帯ムードが高まった。

大会の目的の一つである「連帯」は十分に果たされたが、それにも増して注目されるのは、その後ひたむきに継続されることとなる安全対策への「科学の導入」といえるものであった。

それは、「人間とは何か」にメスを入れ、人間の持つ弱点をカバーする方策に取り組もうとする科学的姿勢が、企業の中に生まれつつあることを示したものであった。



盛況な第1回全国産業安全大会(昭和7年11月・東京・学士会館)

◆ 昭和29年、第1回『全国労働衛生大会』 東京で開催

1954(昭和29)年10月14、15日の2日間、東京の読売ホールにおいて、全国から1,300人の主に労働衛生管理に携わる関係者が集い、第1回の全国労働衛生大会が開催された。

北は富士製鉄(株)室蘭製鉄所から南は旭化成(株)延岡工場まで、いずれも衛生管理の進んだ事業場からの発表であった。結核、鉛中毒、けい肺などの予防に関する報告が目立った。

◆ 昭和44年に『安全大会』と『労働衛生大会』が一本化されて『全国産業安全衛生大会』に

1967(昭和42)年の東京大会は、労働基準法施行20周年記念大会として初めて安全、衛生両大会の合同開催となり、参加者は13,000人を数えた。



全国産業安全衛生大会・総合集会

翌々年の1969年(昭和44年)には現在の「全国産業安全衛生大会」の原型が生まれ、内容を拡充するとともに「緑十字展」を盛大に開催することとなった。

2020（令和2）年、第79回札幌大会は新型コロナウイルス感染症拡大により開催中止を余儀なくされたが、翌2021（令和3）年の第80回東京大会はオンライン配信と並行して開催。以降、全国産業安全衛生大会は現地開催を基本としながら、参加者にはオンラインで視聴可能な限定プログラムを配信するなど、時代のニーズに合わせたイベントに進化している。

総合展示会「緑十字展」の併催

◆ 緑十字展とは

安全衛生保護具、機械の本質安全化にかかる機器、職場環境・作業方法の改善機器、健康増進機器等の展示や装着体験セミナー等を通じて、職場の安全衛生を普及・促進し、労働災害の防止、働く人の心身両面にわたって健康で快適な職場環境づくりに関する安全と健康の最新情報と技術をご紹介しますのが国最大の展示会である。



緑十字展のようす

◆ 第1回緑十字展は昭和43年、安全会館（東京都港区）で

1968（昭和43）年9月30日から10月7日にかけて、東京都港区の安全会館および同会館前広場において、全国労働衛生週間にあわせて開催された。

翌1969（昭和44）年に名古屋市で開催された全国産業安全衛生大会から、毎年同時開催するようになり、現在に至っている。



展示ブース例



安全衛生保護具体験道場